墨書土器を歩く～奈良県出土墨書刻書土器・文字瓦集成上下の刊行～

2021年３月と11月、埋蔵文化財ニュース185・186号として奈良県の出土文字資料集成（非売品）を刊行しました。思いの外多い、１万５千点近い資料が収集されたため、掲載対象は古代から中世の遺物１万144点に限りました。巻末には、少々欲を出して、概説と墨書土器刻書土器の出土地分布図を掲載しています。

分布図をながめてみると、資料の多くは、平城宮・京跡、藤原宮・京跡、飛鳥地域といった宮都の周辺に集中します。このほか、点々とつづく出土地の帯にも気づきます。これらは、京奈和道等、現在の主要交通路のほか、上ツ道、中ツ道、下ツ道といった古代大和の幹線道路と重なる傾向があります。

のみならず、墨書土器は大和盆地の「古道」に沿っても確認されます。例えば御所市では、古代の主要ルートとされる巨勢路だけではなく、５世紀末頃まで多用されたという風の森峠越や葛城・金剛山麓沿いに多く分布します。桜井市から宇陀市にいたるルートでは、主要道路の初瀬街道ではなく、むしろ笠間越え沿いの遺跡からの出土が目立ちます。こうした事実は、文字を読み書きできた古代びとの「活動範囲」を示すのかもしれません。

出土地の傾向はまことに興味深く、このところ休日を利用して、もっぱら古道を歩いています。土器に記された文字を現在の地名にみつけたり、遺跡の立地を体感したり、地元大和の遺跡に新たな発見が頻（しき）りです。私にとって、この集成は、地域に即して文字を読むという初心を、あらためて思い出させてくれる、またとない機会になりました。

（都城発掘調査部　山本 崇）

集成上下の表紙と出土地分布図（藤原京周辺）

非破壊元素マッピング分析装置の導入

文化財の材質調査は、原則として資料を傷つけない手法でおこなわれます。なかでもX線を利用することで、資料を構成する元素の種類やその存在量を非破壊で調査できる蛍光Ｘ線分析は、大変有用な手法です。

奈文研では、2020年に新たな全資料型蛍光X線分析装置を導入しました。従来の装置では、点のように小さな領域の分析にも相応の時間を要していましたが、新たな装置では最大80×60㎝の範囲を迅速かつ隙間なく面的に分析（マッピング分析）することが可能となっています。そのため、例えば壁画のように比較的大型の資料についても、測定領域内の元素の種類や量比等の多彩な情報を、効率よく取得することができます。

また2021年には、超軽元素と呼ばれる炭素や酸素等の検出が可能な、卓上型の超軽元素対応蛍光X線分析装置を導入しました。これまでは困難であった、金属の腐食生成物（さび）をはじめとする種々の酸化物を対象とした文化財の材質分析にも取り組めるようになりました。さらにこの装置では、より高い解像度でマッピング分析をおこなうことができ、調査研究の幅が格段に広がったといえます。

科学分析のための技術は日々進歩しており、文化財の調査研究にも新たな視点や手法をもたらしています。奈文研では、こうした新しい技術を取り入れながら、文化財がもつ情報を抽出するだけでなく、様々な材質の資料に対する適切な分析方法の選択や、より確度の高い分析法の確立を目指し、研究を進めています。今後の成果にご期待ください。

（埋蔵文化財センター　松田 和貴）

全資料型蛍光X線分析装置